

明 治・大正時代の小説家徳富蘆花。代表作『不如帰』は兄の徳富蘇峰が創刊した国民新聞（東京新聞の前身のひとつ）に連載された。連載が終わった翌年の1900年には書籍として刊行される。根強く残る封建的な家族観に対する批判的視線が共感を呼び、ベストセラーとなった。

1907年ごろ、蘆花は現在の東京都世田谷区粕谷に居を構え、その周りには耕地を置いた。我が家を恒春園と名付けた蘆花は、病に斃れる27年までの20年にわたり、妻愛子とともに晴耕雨読の生活を送ったと言われている。

蘆花の死後、邸宅と耕地すべてが愛子夫人によって東京市に寄贈される。のちに蘆花恒春園として一般に公開された。現在の芦花公園は、この蘆花恒春園を核とする周辺二帯の公園を指している。広さは約7万㎡。東京ドームの1・5倍の広さがあり、子どもから年配者までが楽しめる、周辺住民の憩いの場となっている。余談にな

キッズルーム・デビュー 東京・芦花公園団地(2004年・平成16年)

新田匡央
にった・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



るが、芦花公園の「芦」は徳富蘆花の「蘆」の略字である。

◆気軽に入れるスペース

日本住宅公団は58年、緑と文化施設が点在する閑静な住宅地である芦花公園駅の近くに、約570戸の芦花公園団地を建設した。以来40有余年にわたって住民の暮らしを育んだが、老朽化が進んだため建替え事業に着手、2009年に建替え事業が完了した。

URでは、住民の高齢化に対応するための高齢者支援、新たな入居者として呼び込みたい若い子育て世帯のための子育て支援を充実させている。芦花公園団地でも計画当初から子育て支援を組み入れていた。建替えられた団地の一角には、子育て支援専用のキッズルームが確保された。さらに、URは世田谷区を中心に子育て支援を展開するNPO法人せたがや子育てネットと連携する。10年4月には、キッズスペースぶりっじ⑨⑩(以下ぶりっじ)がオープン

した。団地住民だけでなく近隣住民も利用でき、登録者数は600組を数えるほど盛況を誇る。

せたがや子育てネット理事の大槻昌美さんによると、ぶりっじのオープンは週3日。それ以外の日にも親子向けのイベントを開催しているという。誰もが気軽に参加でき、参加者自らが作るというコンセプトのぶりっじは、スタッフにも子育て中の母親が多い。

「公園ではグループに入るまでのハードルが高いのですが、ぶりっじであればたとえ1人で来たとしても、スタッフはもちろん、同じ境遇で悩みや不安を抱えるママたちからも声をかけてもらえるんですよ。そこから、参加者のつながりが広がっていくのです」

かつて公園デビューという言葉があった。悪口、嫌がらせ、村八分など、喧伝されるのはネガティブなイメージばかりだった。今こそ公園デビューという言葉そのものは死語になりつつあるが、公園の中にある「閉ざされた輪」に

◆つながりのきっかけ

近隣に住み、2人の子を持つおろりさん(仮名)。1人で行動するのが苦にならないタイプだったこともあり、人とつながることはそれほどなかった。最初の子が生まれると、子育てに関する些細なことでも悩み始めた。恥ずかしくて自分の母親にも相談できない。一人で考え込んでいるうちに悩みは増幅され、重圧にまでなってしまう。そんなときに知人に紹介されたのが、ぶりっじだった。

通い始めて他の母親たちと話すうち、自分の悩みが特別なことではないと知る。同じようなことではあるという安心感から、おろりさんの意識は激変する。ここに来れば悩まずに済む。人の輪の中にいる勇氣を持てた。ぶりっじに通った2年間で、おろりさんは人の温かさを見直したという。「最初は自分の子で精いっぱいでしたが、だんだん友人の子を見られるようになりました。今は、知

らない子にも優しくなりたいと思うようになりましたね」

同じく2人の子の母であるちひろさん(仮名)は、前に住んでいたところで公園デビューをしようとしたが、ネガティブなイメージに自分が身構えてしまい、積極的に輪の中に入ることができなかったという。団地に引っ越してきたのは1年ほど前。その日から数日後、上の子との散歩の途中にぶりっじを見つけて飛び込んだ。

週3回、ぶりっじに通うちひろさんは、ここに来ると自分が落ち着いていられると話す。同じ立場に立つママ友と、子育ての悩みや不安を気兼ねなく言い合えるからだ。付き合いが高じて、家族ぐるみの交流にも発展している。複数の家族で泊りがけの温泉旅行に行き、父親はゴルフ、母親と子どもは別の温泉に足を伸ばしてくつろいだ。ぶりっじを離れたつながりも、あちこちできている。ぶりっじに来る母親は、子どもの成長とともに入れ替わる。運営

に携わるスタッフも、やがては様変わりするかもしれない。大槻さんは期待を込めてこう話す。「将来的には、なくなるべき場所かもしれないね。わざわざこういう場所を作らなくても、人と人が自然につながり、気軽に集えるようになるといいですね」

地域と人の架け橋になりたいという願いを込めて名づけられたぶりっじ。彼女たちが願うつながりの芽は、確実に芽吹いている。不安を抱えた新たな参加者が通い始め、ぶりっじを離れたつながりも広がっている。団地の高齢者が訪れ、子どもたちから「じいじ」と呼ばれて親しまれている。

ぶりっじは、地域の「開かれた輪」の中心地だ。地域の人が皆どこかでつながっていると、安心感を得られる出発点として、今後の活躍が期待されている。



人気の世田谷区で駅近、緑豊かな団地で安心子育て

街に、ルネッサンス



企画制作 新潮社